

公立中学校における外国人生徒のための
「JSL内容重視クロスカリキュラム」の開発と実施

有 本 昌 代

神戸大学国際文化学会編 『国際文化学』第11号 別冊

(2004年9月30日 発行)

公立中学校における外国人生徒のための 「JSL 内容重視クロスカリキュラム」の開発と実施

有 本 昌 代

1. はじめに

近年、出入国管理及び難民認定法の改正により日本に在住する外国籍の人々が増加し、それに伴う日本語指導が必要な外国人児童生徒も多様化してきている。しかし、公立学校では外国人児童生徒の日本語指導に関し、教材不足や受け入れ体制に様々な問題を抱えているにもかかわらず、これまで体系的かつ具体的な対応策はとられておらず、各学校内の日本語指導担当員やあるいは地域のボランティアが個々に対応しているのが実態である。しかし、多様化する外国人児童生徒に対し個々の対応では解決できない問題もあり、ある程度体系化された基準のもとに外国人児童生徒に対する日本語指導を行う必要があると筆者は考える。文部科学省は2003年7月小学校を対象とする「学校教育におけるJSL (Japanese as a Second Language) カリキュラムの開発」¹⁾の最終報告を行ったが、中学校を対象とするJSLカリキュラム開発についてはまだ構想段階にある。このような背景を受け、本研究では、特に教科学習へ結びつけるための日本語指導の発展を目的とし、公立中学校を対象とした具体的な日本語指導の開発に取り組む。

2. 中学生向け日本語指導カリキュラム開発の必要性

2-1. 中学校における日本語指導の問題点

中学校を対象とした日本語指導カリキュラムの開発に着目した理由として、(1) 小学校では比較的教科学習に溶け込みやすいが、中学校では教科内容がより複雑かつ専門的になり、語彙も難しくなること、(2) 中学校では授業中に使用される言葉や、抽象度の高い内容を学習し、理解するための思考力、認知力が多く必要となること、(3) 年少者向けの教材は開発され始めているが、その大部分が小学生あるいは初級を対象としたものであり、中学生を対象としたものや教科内容を取り入れた教材、認知発達を促進するための教材は出版されていないこと、(4) 先行研究のアプローチは小学校に在籍する外国人児童を対象にしたものであり、中学校を対象にした指導法の研究は進められてい

「国際文化学」第11号: 1-20ページ 2004

神戸大学国際文化学会©有本 昌代

キーワード: JSLカリキュラム開発、生活言語(BICS)、学習言語(CALP)、バイリンガル教育、総合的な学習、語彙分析、発問分析

Key words: JSL curriculum development, Basic Interpersonal Communication Skills (BICS), Cognitive Academic Language Proficiency (CALP), Bilingual Education, Integrated Learning, Words Analysis, Interrogative - Response Analysis

ないことが挙げられる。このような状況のもと、現時点ではなかなか日本語指導と教科学習とを結びつけることは難しいため、中学校の日本語指導カリキュラムの開発が急務であると考えられる。

2-2. 「生活言語」と「学習言語」の違い

石井(1997)では、コミュニケーションの道具としての日本語習得だけでなく、教科学習へつなげるための思考力、認知力の発達という側面から言語能力の発達を考えることも大切であることを指摘している。Cummins & Swain(1986)では、教科学習に必要とされる言語のことを「学習言語(CALP)」といい、これは生活に必要とされる「生活言語(BICS)」とは区別されるべきであるとしている。この言語能力の違いは言語の習得年数にも影響し、「生活言語(BICS)」の場合は2～3年で習得されるが、「学習言語(CALP)」の場合は5～7年かかると言われている。つまり、通常の教科授業に参加するためには、日本語指導が単に言語の指導にとどまらず、教科の内容理解に結びつく学習活動を視野に入れて指導することが重要である。そこで、本研究ではこの具体的な方法の一つとして、「生活言語(BICS)」を指導する初級レベルの日本語から教科学習に移行する段階の日本語指導カリキュラムの開発に取り組んだ。

この日本語指導カリキュラムにより、いくつかの利点が考えられる。一つ目は土台となる日本語カリキュラムを設けることで各学校の学校目標や在籍する児童生徒のレベルやニーズにあった内容を選択しながら柔軟に対応していくことが可能になると考えられ、日本語担当教師の負担軽減にもつながる。二つ目は、日本語指導を急遽担当することになったり、新年度に日本語指導担当教師の異動が起こってもある程度同じレベルの日本語指導の実施が可能となる。三つ目は、個々の授業レベルでの活動ではなく、地域や都道府県全体の学校で取り組むことのできるある程度体系化された日本語指導を実行することが可能となる。

3. 「JSL 内容重視クロスカリキュラム」の特徴

本研究では、外国人生徒が公立中学校で学ぶ場合、第二言語である日本語で教科内容を学習することから、イマージョン・プログラムに相当すると考え、本研究ではインターナショナル・スクールでのバイリンガル教育のカリキュラムを公立学校での日本語指導に応用させ、開発に取り組んだ。

本研究で開発に取り組んだカリキュラムの特徴として以下の点が挙げられる。

- (1) 本研究の日本語指導カリキュラムは単に日本語学習のみに焦点をあてた指導ではなく、複数の教科間に関連のある学習テーマを設けた「内容重視」の日本語指導である。トピックを通し教科学習に必要な「学習言語(CALP)」を習得させる。
- (2) 複数の教科と日本語指導を横断的、総合的に融合させることで知的発達と思考力の発達を支援することを目的とした「クロスカリキュラム」である。
- (3) 「総合的な学習の時間」において育成する「生きる力」、つまり「問題発見・解決能力」「発表評価能力」「情報処理能力」の育成を支援し、そして実践的かつ総合的な日本語能力の育成を目指したものである。これらの能力は日本人生徒のみならず、外国人生徒にとっても学校教育の中で育成される必要があると考える。

そこで、本研究で開発するカリキュラムを「JSL 内容重視クロスカリキュラム」と名づけた。この「JSL 内容重視クロスカリキュラム」では、難しい表現を簡単な日本語の表現に置き換えて学習する過程で学習者自身が試行錯誤しながら、日本語の文法知識や学習内容に関する知識を学んでいくとい

う「気づき」の学習態度の育成、そして誤りながらもその誤りから学び、日本語での表現力を身に付けていくことが大切であると考える。

図1は「JSL 内容重視クロスカリキュラム」が「日本語指導」「教科指導」「総合的な学習」の知識や能力とどのような関わりをしているのかを示している。このカリキュラムは、日本語指導にもっとも比重を置くが、以下に示した能力の育成を総括的に取り入れたカリキュラムである。

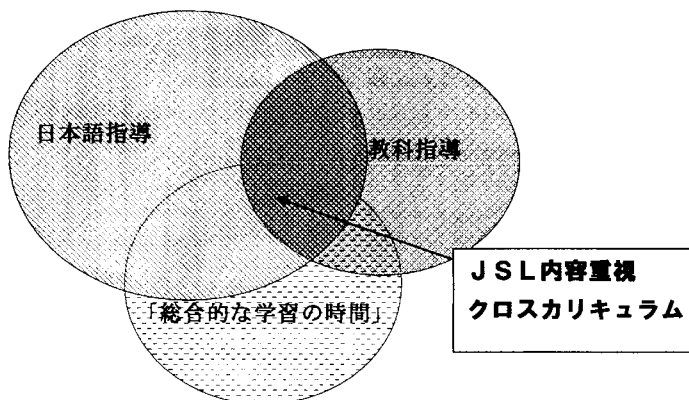


図1 「JSL 内容重視クロスカリキュラム」の位置づけ

3-1. 先行研究に見られるアプローチとの比較

教科学習を可能にするために「学習言語 (CALP)」の習得が必要になることは、これまでの先行研究においても述べられている。齋藤 (1999) は教科学習に必要とされる学習言語能力を身につけさせるための方法の一つとして、「内容重視による日本語と算数の統合学習」をあげている。このアプローチは、教科に特有用語、文法的知識を学習場面での活動を通して身につけることが必要であるとし、内容のある文脈の中で日本語の学習言語能力の育成を主張している。しかしながら、ここに見られるアプローチは、ある単一教科の枠組みを超えず、つまり「日本語」と「算数」という形で行われる日本語指導であり、これでは教科学習の予習あるいは補習の域を超えられず、実際の活動を通じた自然な文脈におけるコミュニケーションの機会を得ることができるとは考えにくいのである。清田 (2000) では、「日本語」と「国語」の統合学習としての内容重視のアプローチ、矢崎 (1998) では「算数の文章題」における日本語指導の考察を行っているが、やはり単一の「教科」という枠組みの中での教科内容の指導にとどまっている。「内容重視」という限り、学習する内容を中心に構成されるカリキュラムを考案しなければならない。つまり、あるトピックの下に、関連する教科内容を横断的、総合的に統合していくカリキュラムにこそ「内容重視」としての意義があると思われる。

先行研究のアプローチは「教科」をベースに置き、その枠組みの中においてそれぞれの教科の「内容」に注目したアプローチとなっている。つまり、先行研究では知識の学習に核を置いた指導であると言えるが、「JSL 内容重視クロスカリキュラム」は、まず「トピック」をベースに置き、そのトピックに関する教科内容を横断的に取り入れている。そして、「総合的な学習」で育成される能力を支援し、複数の教科をクロスさせた点において、先行研究で述べられたアプローチと異なる。

図2は先行研究で述べられたアプローチ、「総合的な学習」と本研究で開発するカリキュラムの目的とその指導の過程を比較したものである。「先行研究でのアプローチ」と「JSL 内容重視クロスカリキュラム」が大きく異なるのは、「先行研究でのアプローチ」が教科指導(単一教科)と日本語指導を結

びつけることが目的であるのに対し、「JSL 内容重視クロスカリキュラム」では最終目標は教科学習に必要な日本語能力の習得であり、その日本語学習の過程で教科内容に関する知識や「情報処理能力」や「発表評価能力」を身につけるといふ点である。

本研究で開発する「JSL 内容重視クロスカリキュラム」はトピックのもとに構成された活動やプロジェクトを通し、実践的、総合的な日本語の学習言語能力を習得することが重要であると考え。この点において、従来とは異なる視点で教科と日本語指導を結び付けたカリキュラムである。

3-2. 「総合的な学習」のカリキュラムとの比較

また、図2に示された「総合的な学習」と「JSL 内容重視クロスカリキュラム」を比較すると、両者において大きく異なるのは、「総合的な学習」が教科の基礎的な知識を土台とし、変動の激しい社会で生きていくための「問題発見・解決能力」や「情報処理能力」を身につけることであるのに対し、「JSL 内容重視クロスカリキュラム」では最終目標は教科学習に必要な日本語能力の習得であり、その学習過程で教科内容に関する知識や「情報処理能力」や「発表評価能力」を身につけるといふ点である。

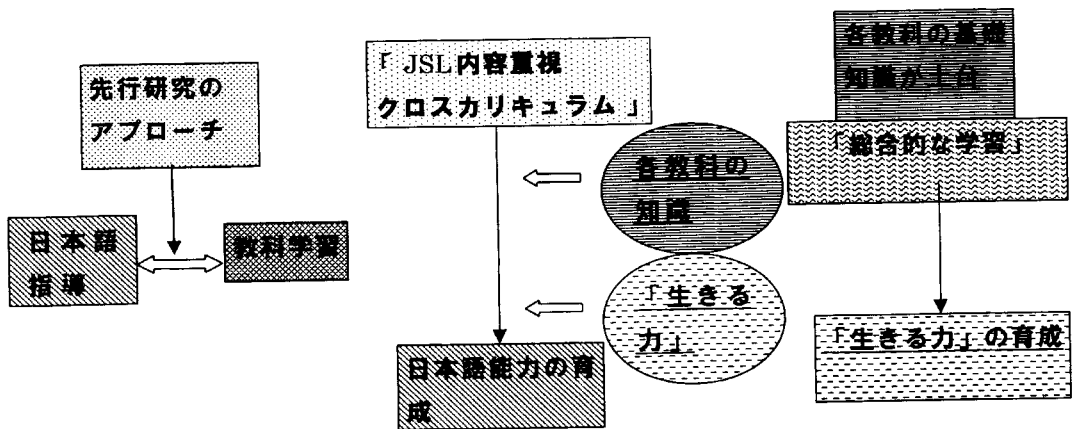


図2 先行研究のアプローチ・JSL 内容重視クロスカリキュラム・総合的な学習の比較

3-3. MYP (The Middle Years Program)

公立学校に在籍する外国人児童生徒が多様化する背景を考慮し、移民を多く受け入れているアメリカやカナダなどで行われるバイリンガリズムの教育政策(ESL: English as a Second Language)やイメージョン・プログラムから学ぶものがあるのではないかと考え、本研究の日本語指導カリキュラムの開発にあたり、バイリンガル教育のカリキュラムの要素を取り入れた。これらのカリキュラムは経験やプロセスを重視し、内容を重視した第二言語教育(Content-Based Instruction)である。

MYP (the Middle Year Program) ¹¹⁾ はその中でも IBO (International Baccalaureate Organization) が認定しているカリキュラムで、しっかりとした体系のもとに編成されている。この IBO の MYP に着目した理由は二つある。まず一つ目は、公立中学校に在籍する外国人生徒は、第二言語である日本語で教科内容を学習するという点でイメージョン・プログラムの過程に相当する。そのため、第二言語の習得と教科学習においてその効果が大きいと期待される。もう一つは、IBO は国際的な組織で、MYP がインターナショナル・スクールなど世界の国々において実施されているカリキュラムであることから、日本の公立中学校の外国人生徒にとってグローバルな視野を取り入れた教

育を行うための効果的なカリキュラムとして参考になると考えたからである。この MYP を取り入れ、日本の公立中学校の日本語指導に応用させることは、教科学習への移行を目指した日本語指導カリキュラムとして意義があると思われる。

4. 「JSL 内容重視クロスカリキュラム」開発の具体的段階

4-1. 「JSL 内容重視クロスカリキュラム」開発の手順

(1) トピックの決定:

①公立中学校で使用されている 5 教科の教科書の単元内容を Cummins & Swain の「言語能力発達モデル」(1986)の 4 つの領域ⁱⁱⁱ⁾にわけ、「学習言語 (CALP)」の領域 (C,D) に分類されるトピックを基に教科間に関連のあるトピック決定を行う。

② IBO 認定の MYP の 5 つの関連概念に分類する。

(2) 教材収集:学校の教科書や日本語教材、生教材からトピックに適した教材を収集する。

(3) クラスタ^{iv)}:それぞれのトピックで学習される内容に関し、教科間の関連をクラスターに表す【資料 1】。教材をもとにした活動やワークシートを作成する。

(4) 目標設定:それぞれのトピックで学習するねらい、教材、文型・語彙、授業の流れを表す。この段階で、学習における評価の観点を示しておく。

(5) 指導計画書の作成:教師と生徒のやりとり、学習活動の過程、活動の目的を表す。

(6) 授業実施:授業観察により、生徒の発達の観察を行い、授業改善を行う。

4-2. 「JSL 内容重視クロスカリキュラム」実施時期

公立学校での日本語指導は現状として、初級クラスでの指導が終われば、外国人生徒はすぐに教科の授業に参加することとなるが、教科学習についていける生徒は少ない。外国人生徒が教科学習にスムーズに移行するためには、やはり少なくとも 3 つの段階を設定しなければならないと考えられる。

図 3 に示された 3 つのレベルのうち「JSL 内容重視クロスカリキュラム」は【第 2 段階】で実施され

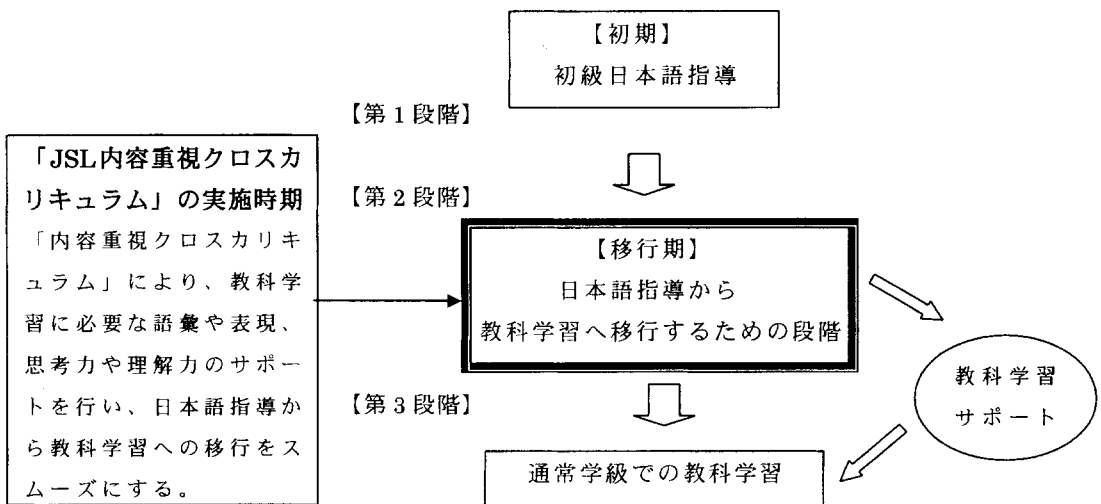


図 3 「JSL 内容重視クロスカリキュラム」の実施時期

ることとなる。【第1段階】は「初期段階」で、教室用語などの教室で必須となる「サバイバル日本語」や日常生活で必要な「生活言語(BICS)」の習得を目的としたものである。【第2段階】は教科学習への移行する時期であることから、本研究において「移行期」と名づけた。この段階において「JSL 内容重視クロスカリキュラム」を実施することで、複雑な文型や教科で使われる語彙、内容を取り入れて学習する。可能であれば、この段階から教科学習を想定した中学生用の教科書等を用いた個別・少人数での教科指導サポート(本研究で開発するカリキュラムではない)を加えることでより一層教科学習に必要な教科の専門知識の獲得や中間・期末テストでの成績向上の助けにつながれると思われる。そして、【第3段階】において通常学級での「教科学習」を受けることになる。この段階でも教科サポートを取り入れることができれば一層外国人生徒の教科学習を支えることができるであろう。

4-3. 「JSL 内容重視クロスカリキュラム」実施の留意点

- トピックの選定:「JSL 内容重視クロスカリキュラム」のトピックは、公立中学校での教科学習3年間で指導される内容をもとに構成されているので、中学1年生から中学3年生までの学年の異なる外国人生徒が同一クラス内で学習することが可能である。必ずしも示されたすべての教材を使用しなければいけないというわけではなく、学習者のニーズやレベル、学校の進捗等にに合わせて日本語指導教員が適時指導するトピック、内容、順序、期間を組み合わせることで決定することが望ましい。
 - クラス形態:日本語指導をしている学校の体制は「センター校」や通常時間内の「取り出し授業」、放課後の日本語指導など様々であると予想されるが、「JSL 内容重視クロスカリキュラム」は日本語の初級指導を終了し、「生活言語(BICS)」としての日本語を習得していることを前提にすれば、どのような体制においても実施可能である。ただし、このカリキュラムではペアやグループワークなどの集団による学習の相乗効果を取り入れているため、なるべく2人以上のクラスで使用することが望ましい。
 - 能力基準設定:「初期」「移行期」「教科学習」の3つのレベルの能力基準設定をおこなった。この能力基準には、日本語能力試験などの一般に示された日本語の初級レベルの能力を中学生用に編集し、また「教科学習」では文部科学省に示された学習指導要領に示された能力を参考にまとめた。「移行期」の能力のめやすは「初期」と「教科学習」の橋渡しとなり、かつ MYP や「総合的な学習」で育成する能力を取り入れた基準を設け、作成した。【資料2】
 - レベル分け:本研究において開発したオーラル・テスト、移行期プレースメント・テスト、インタビューテストを行ってレベルを決定する。
 - 評価:対象となる外国人生徒は学年や日本語学習歴や家庭環境も異なることから、個人の発達の状況を評価する「個人内評価」や、「能力基準」をもとにした「絶対評価」の観点から評価されなければならない。しかし、「個人内評価」あるいは「絶対評価」で評価されるということは、生徒個々の能力に応じて評価できるということであり、多少学力に差がある場合でも、ある程度一緒に指導できるという利点もある。この「JSL 内容重視クロスカリキュラム」においては、テストの結果だけで評価するのではなく、目標へ向けた学習のプロセスや発表内容など、そこにいたるまでの過程を評価する。また、自分で自分を評価する「自己評価」や他者を評価する「相互評価」、学習プロセスの評価を重視した「ポートフォリオ評価」などを取り入れた評価を行う。
- 以上のことに配慮して「JSL 内容重視クロスカリキュラム」を実施すれば、このカリキュラムの効果が上がるとと思われる。

5. 「JSL 内容重視クロスカリキュラム」実施の概要

5-1. 「JSL 内容重視クロスカリキュラム」実施の経緯

「JSL 内容重視クロスカリキュラム」の実施に至るまでの経緯についてまとめる。

- 2003 年 12 月に神戸市教育委員会を通し、実践校を紹介される。
- 神戸市教育委員会、実施校(K 中学校)の校長と神戸大学留学生センター水野マリ子助教授と筆者による話し合いがもたれ、3 月に「JSL 教室」を開設することが決定。
- 2003 年 3 月から放課後に、ボランティアによる日本語指導の「初期クラス」と筆者が担当する「移行期クラス」(「JSL 内容重視クロスカリキュラム」の授業)の指導が開始される。

5-2. 「JSL 内容重視クロスカリキュラム」実施の目的

「JSL 内容重視クロスカリキュラム」の試みが、実践的、総合的な日本語力を育成するだけでなく、「教科学習」に必要な「学習言語(CALP)」の習得と思考力の発達に貢献できるかどうかについて考察する。以下の仮説に関し分析を行い、「JSL 内容重視クロスカリキュラム」の有効性を考えたい。

5-3. 「JSL 内容重視クロスカリキュラム」実施の仮説設定と分析の方法

仮説 1 :「JSL 内容重視クロスカリキュラム」により、外国人生徒は、日本語学習に主体的、積極的に参加する。

仮説 2 :「JSL 内容重視クロスカリキュラム」により、外国人生徒は、教科学習に必要な日本語の「学習言語(CALP)」を身に付けることができる。

仮説 3 :「JSL 内容重視クロスカリキュラム」により、認知発達を促す指導が行える。

5-3-1. アンケートによる授業に対する意識調査

まず**仮説 1**では、「JSL 内容重視クロスカリキュラム」に対する外国人生徒の態度・意識調査を行う。毎授業後(計 10 回)に、生徒に日本語の授業に関するアンケートを実施し、「JSL 内容重視クロスカリキュラム」を用いた授業を生徒側から評価する。また、日本語指導者の授業記録と見学した教師からの評価をもとに教師側からもカリキュラムの評価を行う。質問項目と結果は第 6 章 2 節に示す。

5-3-2. 教科書・テキストの語彙分析

仮説 2では、果たして「JSL 内容重視クロスカリキュラム」に基づいた教材で教科に必要な語彙を獲得できるのかについて分析する。具体的には公立中学校の教科書と「JSL 内容重視クロスカリキュラム」のテキストを対象に、トピックに関連した単元に限定し、使用される語彙を比較分析する。JSL テキストにおいて、どれだけ中学校で学ぶ語彙をカバーできるかを分析し、それぞれの教科書・教材の語彙の特徴を明らかにする。

具体的な分析の方法として、①「品詞」②「語彙」の難度③「文節数」の観点から分析を行う。また「語彙」の分析をもとに④「生活基本語彙」「教科共通語彙」「教科専門語彙」の分類を行い、それぞれの語彙群がどれくらいの比率で使用されているのかを分析する。「生活基本語彙」とは生活における基本語彙となるもので、「紙、本、えんぴつ」などが挙げられる。「教科共通語彙」とは、5 教科(国語、社会、数学、理科、英語)に共通する語彙を示す。例えば、「文化」「環境」「問題」など複数の教科に共通して使用される語彙のことである。「教科専門語彙」とは「平行四辺形」(数学)、「光合成」(理科)、「日付変更線」(社会)、「助詞」(国語)などのように教科において専門的な知識を表す語彙である。「教科共通語彙」と「教科専門語彙」が明らかになれば、トピックにおける概念を理解するために必要な語彙の選出

に結びつき、効果的な指導が行える。また、「JSL 内容重視クロスカリキュラム」に基づく教材が「教科共通語彙」「教科専門語彙」をカバーすることができれば、このカリキュラムが教科に必要な語彙の指導に十分効果があると言える。

5-3-3. 発問による授業構造分析

【仮説3】では、授業のテープ・VTRや生徒のプロダクト(作文やプレゼンテーションなど)を用いて「JSL 内容重視クロスカリキュラム」の授業の構造分析を行う。具体的には思考をうながす教師の発問と生徒の応答の事例を抽出する。まず日本語の「初級クラス」と「国語」の教科授業における発問例を取りだし、それぞれの授業の特徴を考察し、本研究のカリキュラムの授業と比較する。

6. 「JSL 内容重視クロスカリキュラム」実践報告

6-1. 「JSL 内容重視クロスカリキュラム」実施の概要

●実施時期: 2003年7月から8月(2週間集中)の計30時間。

●対象生徒: 日本語学習歴3～6ヶ月程度の中学1年生1名、中学3年生2名の計3名。

●生徒の日本語能力

- ・日常会話レベルの間違いがあり、流暢ではないが、何とか意志疎通はできる。
- ・発音に不明確さが残っており、ナ行とラ行を混同し、特に「ね」と「れ」、「の」と「ろ」の区別が困難である。
- ・初歩的な文法の間違いが見られる。総合的、応用的な場面で文法を使いこなす力がまだ習得できていない。
- ・教科の勉強についていくのが難しい。

●トピック選定・指導内容

- ・「JSL 内容重視クロスカリキュラム」のトピックのうち「環境問題」を取り上げ、＜絶滅する動物たち＞のテーマで指導内容を構成した。(【資料1】クラスター参照)
- ・「初級」で日本語の文法事項は学習済みであるため、より「教科学習」へ近づけるための指導目標を立てる。
- ・具体的な指導目標として、(1)トピックのもとに構成された実際的なコミュニケーションの機会を通し、正しい日本語の文法や発音を身につける。(2)トピックをもとに、教科学習で必要となる学習言語や表現を学習し、日本語での表現力を身につける。(3)プレゼンテーションや作文を通して思考力を深め、考えたことを日本語で伝えることを学び、総合的な日本語能力を伸ばす。

6-2. 「JSL 内容重視クロスカリキュラム」実施と考察

6-2-1. 仮説1: 「JSL 内容重視クロスカリキュラム」の授業に対する意識調査

環境を取り巻く問題を取り扱った「JSL 内容重視クロスカリキュラム」の教材を用いて、長文読解、内容理解を通して環境問題について考えた。そこでは、教科書だけでなく生の資料も扱い、内容をまとめることや、必要な情報を読みとるなどの情報処理能力を養った。「JSL 内容重視クロスカリキュラム」を用いた授業に対する生徒の感想と教師の感想は以下の通りである。生徒たちが書いた感想から、彼らの関心が日本語学習のみに向けられているのではなく、環境問題に対しても関心が向けられている点、また学習の中で自分をモニターして、前向きな態度で学習している様子がうかがえる。以下に自由記述の一部を提示する。(S1～S3は生徒を表す。)

7月25(金) <長文内容読解>

【生徒の感想】	・カブトガニの問題全部正解。(S1) ・文章を読むのを練習するのはおもしろかった。(S2) ・問題ができた。文を読むこと(がおもしろかった)やる気がでてる。(S3)
【教師の感想】	・トピック教材を通して、国語に必要な能力(表現力や応答)についても指導した。内容の説明をすることでより理解を深められ、生徒のやる気を引き出すことができた。

7月28日(月) <環境問題の語彙カルタ・世界地図・リサーチの説明>

【感想】	・世界地図の州と大陸覚えた。(S1) ・地図を勉強するし、動物が絶滅する原因を勉強するのはよかった。絶滅する動物の調査はおもしろかった。日本語がもうすぐ上手になるな!(S2) ・地図の勉強をする。(S3)
【教師の感想】	・「環境問題」に関するカルタで語彙の読みと意味を確認し、世界地図と環境問題を関連させた。社会に関連させることで、教科学習への関心を高めることができた。リサーチに関しては、今まで経験がなく慣れていないこともあり、少し取り組みが難しかったようであった。しかし、S2のようにとても関心を持って学習し、日本語に自信を持ち始めていることがコメントからわかる。

7月29日(火) <リサーチに関する作文作成・発表の練習>

【感想】	・作文が完璧にできた。(S1) ・漢字を勉強するし、作文の書き方を勉強するのはよかった。(S2) ・絶滅動物を守る運動が大切だと思います。(S2) ・絶滅動物の作文を書いた。(S3)
【教師の感想】	・リサーチのまとめの作文を作成し、発表のための発音指導を一人ずつ行った。発音指導では、テープに声を録音し、それを聞きながらチェックすることで、生徒に直さなくてはいけない発音に関する認識を高めることができ、授業に対する満足度が得られた。作文の読みで正しい発音ができるようになることで、コミュニケーション力としての自信につながった。

以下に、アンケート項目に関する全体の結果をまとめる。

表1より、全体を通して90%以上の好意的な意見が得られた。「簡単だった」の項目については他

表1 「JSL 内容重視クロスカリキュラム」に対する意識調査

項 目	S1	S2	S3	合計(/150)
よかった	50	41	50	141 (94%)
楽しかった	50	42	48	140 (93.3%)
簡単だった	50	39	43	132 (88%)
やる気があった	50	43	49	142 (94.6%)
わかりやすかった	50	42	50	142 (94.6%)
満足だ	50	46	49	145 (96.6%)
教科の勉強に役立つと思った	50	44	49	143 (95.3%)
日本語に自信が出た	44	47	50	141 (94%)

と比べると低い値(88%)であるが、これは授業内容が彼らにとって挑戦意欲を引き出せる難度の内容であると考えられ、決してマイナス要因ではないと考えられる。

アンケートの記述欄に見られる「生徒の感想」をふまえ、「教師の感想」を以下にまとめる。

- ・日本語の指導だけでなく、トピックの内容に関する知識を深め、感想を述べている。
 - ・日本語の授業に対する積極的な態度が得られた。教科を取り入れた日本語指導に対する満足感が見られ、自信につながっている。
 - ・通常、単調になりがちな文法指導を内容とつなげることで、実践的、応用的な文法能力の向上につなげることができ、興味・関心を引きつけやすい。また、トピックに関連して、生徒の好きな教科や内容を扱うことで、関心を引きやすくなる。
 - ・自分の発表を振り返り、自己をモニターすることで、発表に対する反省点を出している。このように今後の学習や発表への改善意欲が見られたことは成果として考えられる。
 - ・動物の絶滅に関するテレビ番組を見るなど、授業外での学習活動にも積極的な態度が見られた。テレビで得られた知識も活用し、作文や発表の場で活かされていた。
- また、授業を見学した教師からは、以下のようなコメントが得られた。
- ・うまく教科授業を組み合わせていたのがよかった。(7月28日)
 - ・生徒が生き生きと活動していた。(7月28日)
 - ・授業の目的がはっきりしており、生徒にもよく理解されていた。(7月30日)
 - ・テーマに沿って、話題にまつわる数学の教科がうまく盛り込まれていた。(7月31日)

6-2-2. 仮説2:教科書の語彙分析

- 分析方法:公立中学校で一般に使用される5教科の教科書の「環境問題」を取り扱った単元を以下の観点から分析する。

- (1) 品詞分析から、教科書とテキストの特徴を分析する。
- (2) 日本語能力試験に照らし合わせ、語彙や文型の難度を見る。
- (3) 文節による分析により、文の難度を分析する。

また、同様に「JSL 内容重視クロスカリキュラム」をもとに作成したテキスト(以下 JSL テキスト)と、現在公立学校の日本語指導で使用されている市販の子供向け日本語テキストも分析し、それぞれの教科書・テキストの特徴を明らかにし、JSL テキストの効果を検討したい。今回取り上げた市販の子供向け日本語テキストは、『こどものものにほんご1・2』『日本語をまなぼう1・2・3』である。

また、教科書の語彙分析の結果から「生活基本語彙」「教科共通語彙」「教科専門語彙」リストを作成し、今後の指導に活かしたい。

- 結果:①品詞分析により、三種の教科書・テキストの全品詞を対象とした分析の結果、共通した結果が得られた。「名詞」「助詞」の占める割合(30%~40%)が共に高く、その次に、「動詞」の割合(10%)が高いことがわかった。「い・な形容詞」の割合(5%未満)は、どの教科においてもあまり高くない。

自立語を対象とした分析の結果においても三種とも共通した結果が得られた。「名詞」「動詞」「形容詞類」の順で割合が高く、これらで全体の90%を構成していることがわかった。

- ②日本語能力試験級の分析により、中学教科書の特徴として以下の点が挙げられる。
使用される名詞のほとんどが日本語能力試験2級の語彙(多くが漢語)であり、語彙の難度

表 2 中学教科書・JSL テキスト・市販子供向け日本語テキストの語彙レベルの比較

日本語能力 試験級	国語	英語	地理	歴史	公民	数学	理科 1 下	理科 2 下	JSL テキスト	こどもの にほんご	日本語を 学ぼう
2 級以上の 占める割合	56.0 %	45.2 %	69.80 %	70.0 %	70.4 %	51.6 %	73.6 %	66.0 %	55.4 %	38.6 %	36.4 %

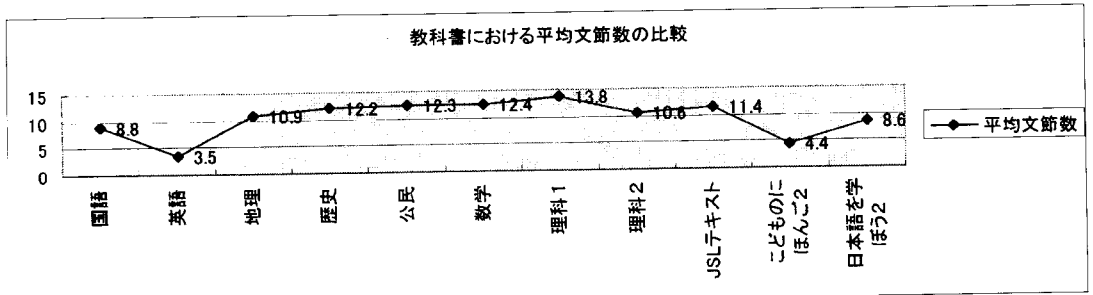
が高いと言える。表 2 を見ると、JSL テキストにおける 2 級以上の語彙の割合 (55.4 %) は、市販の子供向け日本語テキストよりも高く、中学教科書と同じ傾向にあると言える。動詞や形容詞は 4 級、3 級の語彙が多く、これらは「生活基本語彙」にあたることがわかった。このことから、動詞と形容詞に関しては、生活基本語彙をしっかり定着させておく必要があると言える。

また「教科共通語彙」「教科専門語彙」リストの作成の結果、「教科共通語彙」として「環境」「エネルギー」「課題」「酸性雨」「再利用」「資源」「自然」「森林」「廃棄物」「リサイクル」などが得られた。「教科専門語彙」としては、「理科」では「化石」「気象」「光合成」「酸化物」「スライドガラス」、「社会」では「汚染」「政府」「制定する」「排出物」「水俣病」、「数学」では「キロワット」「上昇する」「単位」「電球」「比例」が得られた。

このように示された「教科共通語彙」「教科専門語彙」は 2 級レベル以上の難度の高い語彙であり、中学教科書の理解が難しい理由であると言える。しかし、「教科共通語彙」「教科専門語彙」に示された語を効果的に指導すれば、教科学習に対応できる日本語の学習語彙を習得できると考えられる。

「JSL 内容重視クロスカリキュラム」に基づいた教材が、これらの語彙群をどの程度カバーできるかについて分析した結果、JSL テキストにおいて「教科共通語彙」の全 86 語中 21 語 (24.4 %) を学ぶことができる。この結果を一般に市販されている子供向け日本語テキスト二種 (『こどものにほんご 1・2』『日本語を学ぼう 1・2・3』) の使用語彙と比較すると、『こどものにほんご 1・2』では 2 語 (2.3 %)、『日本語を学ぼう 1・2・3』においても 2 語 (2.3 %) となっている。「教科専門語彙」に関しては、全 580 語中、JSL テキストは 30 語 (5.1 %)、『こどものにほんご 1・2』は 15 語 (2.5 %)、『日本語を学ぼう 1・2・3』は 24 語 (4.1 %) となっている。市販子供向け日本語テキストでは「教科共通語彙」よりも「教科専門語彙」のカバー率が高くなっているが、これは『こどものにほんご 1・2』において、日常生活の遊ぶ場面で使う語として「昆虫」「さなぎ」などが導入されており、これは、「理科」で使用される特殊な言葉として扱われるためであると考えられる。また『日本語を学ぼう 1・2・3』は、総合的な日本語力を目指したものでなく、教科単元をそのまま用いているため、例えば「化石」「気象」「スライドガラス」「窒素」「比例」など教科特有の専門語彙の割合が高くなったと考えられる。

- ③ **文節による分析** については、平均文節数 (1 文における文節数) の比較を行い、その特徴を考察した。その結果、平均文節数の最も高いものは「理科 1 下」で、これは 1 文に 13 文節ある。ついで、「数学」(12 文節)、「社会」(12 文節)、「JSL テキスト」(11 文節) である。この結果から、文の構造の複雑な教科として、「理科」「数学」「社会」が挙げられる。しかし、JSL テキストにおいても、平均文節数が 11 文節ということから、文の複雑性が高く、中学教科書の難度に十分対応できる構造であると言える。



教科書の語彙分析の結果から JSL テキストは、(1) 難度の高い 2 級以上の語彙を取り入れている点、(2) 市販されている子供向け日本語テキストよりも「教科共通語彙」「教科専門語彙」を多くカバーできる点、(3) 中学教科書の文構造の複雑性に対応できるものであると言える。

このことから、JSL テキストは、教科学習へ移行する際に市販の初級の日本語教材では補いきれない語彙や文の複雑性を取り入れることができ、初級から教科学習への移行の段階に適したテキストであると言える。

6-2-3. 仮設 3: 授業の構造分析

「JSL 内容重視クロスカリキュラム」の授業は単に日本語の指導にとどまらず、認知的な活動を支えることを目的としている。生徒に日本語で考え、表現する機会を与えることで、思考の発達を促進すると考え、教師の発問に着目した。以下にそれぞれの授業における分析を行う。まず、『こどものにほんご 1・2』を使用した初級クラスの授業と公立中学校における「国語」の教科授業を取り上げ、発問の比較を行った。このことで、2つの授業における発問の特徴が得られ、「JSL 内容重視クロスカリキュラム」の取るべき授業の構造も明らかになると考える。

以下の授業は K 中学校で実施されている初級クラスの授業である。指導者は日本語指導経験者のボランティアである。指導場所は K 中学校の「JSL 教室」で、対象者は初級レベルの中国人 2 名(来日 3 ヶ月未満)である。

【初級の日本語授業】10 月 14 日 こどものにほんご 1「第 9 課」

<語彙の確認>

T: これは? 何ですか?

S: 料理。

T: これは?

S: ダンス。

T: ダンス。

T: これは?

S: ジャズ。?

<発展>

T: どこへ行きましたか?

S1: デパート。

T: デパートへ行きました。

T: だれと行きましたか?

S1: (無言)

T: お母さんと? 友達と? だれと行きましたか?

S1: 一人。

T: 一人で、行きました。

T: 何を買いましたか?

<文型の代入練習> S1:映画は好きですか? S2:ええ、でも、あまり見ません。時間がありませんから。 S1:旅行が好きですか? S2:ええ、好きです。でも、あまり行きません。お金がありませんから。	S1:えー… T:自転車?! S1:バスケットボール T:バスケットボールを買いました。いいですねー。いくらですか? S1:二千…二百二十円。 T:Rくん、バスケットボールが好きですか? S1:はい、好きです。 T:とても好きですか? S1:はい。
--	---

初級のテキストを使用した場合、そのほとんどが語彙に関する質問や文型などの代入練習である。これらの発問の目的は「語彙」や「文型」の獲得であり、日本語指導に特徴的な発問であるが、実際のコミュニケーションではあまり見られない発問形式である。なぜなら、実際のコミュニケーションでは、あらかじめ発問者が答えを知っている質問はまずないからである。＜発展＞の発問では、より実際のコミュニケーションに近い形であるが、初級の段階では会話の発展性が限られることが特徴的である。生徒のわからない質問は避けることが初級の特徴であるから、これは当然の結果である。

次に、「国語」の教科授業の発問分析を行い、「初級クラス」と「教科授業」の日本語の間にどれだけの差があるのかを見ていきたい。以下の授業は、公立中学校において日本人生徒を対象に行われた「国語」の教科授業である。指導者は国語科担当の教員であり、日本語指導の経験はない。対象者に外国籍の生徒は含まれない。

10月2日 「国語」<ヒートアイランド>(環境を扱った単元) T:例えば、どんなことにエネルギーを消費していますか?教科書にどんなことが書かれていますか? S:暖房、冷房、給湯、照明、輸送 T:そうやね。快適なくらしには、熱、つまりエネルギーが出るんやね。じゃ、みんなの生活の中でどんな時に熱が出てると感じる?例えば、どんなときに道路が暑いと感じる? S:散歩してるときに、犬がかげにいきたがる。 S:プールサイドに立っているとき。 T:そうやね。コンクリートの方が土より熱を蓄えてしまう効果があるんやね。 T:教科書に42度であるということは、どういう状況?作者はその様子、心配をどんな言葉で表していますか?教科書から抜き出して。 S:危機的状況。 T:危機になる理由をまとめてみましょう。なぜ、そのような危機的状況になると筆者は<u>言っているんやろうか</u>? S:東京のエネルギー消費が年々増加している。 S:ビルの高層化による熱を蓄える効果の増大。 S:緑地の減少。
--

T:じゃ、みんなの知っていることでどんな例がありますか?

S:公園の木が減っている。

S:マンションがどんどん建っている。

S:先生、増えてるのは東京だけ?

T:いや、全体的に増えてるんやけど、今は東京に絞って考えてます。

このように、教科の教師が発話する質問の特徴として、下線部に示したように「方言」やいわゆる正しい文法の日本語ではなく「話し言葉」を含んでいる点が挙げられる。また、「環境」を取り巻く内容に関する発問では、教科書に書かれた内容の読解、身近な生活について観察や洞察を促す発問が行われている。

以上に見たように、初級の日本語クラスと教科授業の特徴にはかなりの隔りがある。しかし、初級の日本語の授業における発問にはその授業の特性から制限があるため、教科学習の授業へ近づく発問を行うことには限界がある。教科学習へ移行するためには、やはり初級日本語の授業をより発展させた授業を行う必要があるが、これを「JSL 内容重視クロスカリキュラム」の授業で補い、教科学習の発問構造に近い形の発問を行うことができると考える。

以下に、「JSL 内容重視クロスカリキュラム」の発問分析による授業構造を見る。

7月30日 < A君の発表「絶滅する動物『とら』」に対する質疑応答 >

S1:森林伐採でとらの家がなくなったら、とらを、どうしたら、いいですか?

S3:えっ?!

S1:森林伐採でとらの家がなくなったら、とらを動物園にいれたら、いいですか?

S3:それは、いいですよ。

T:とらは、自然の森の中と動物園とどちらの方が幸せ、幸福、うれしいと思いますか?

S3:自然に住んでの方がいいですよ。

S1:あの一、とらが、未来、未来、とらは絶滅したとき、どうする?

S3:今から、自然を守る。森林伐採をしないで、んー、草食物を守る。

T:中国では、とらとかジャイアントパンダとか、動物を殺すことは禁止されていますか?

S3:禁止?

T:「とってはいけません」ということ。

S3:おお、禁止ことがあります。

T:でも、そういうふうには殺す人がいるんですか?

S3:たぶん、いると思います。たぶん、いるんですよ。

S1:どうして、どうして、人間がとらが、こ、こ、

T:殺す?

S1:おお、殺しますか。

S3:とらが殺された後で、毛皮をとって、お金がいっぱいもちたら、とらを殺すことがある。

S1:警察は?捕まえますか。

S3:あまり捕まえません。

T:ああ。

S1: だから、殺す人がいっぱいいる。

S3: 禁止は、今、政府が、大きな影響を与えるからもっと少なくなります。

(政府が禁止することは、大きな影響を与えるから、とらを殺す人数は少なくなります。)

「JSL 内容重視クロスカリキュラム」の授業において、発問者が答えを知らない質問、つまり本来の意味でのコミュニケーションの場を授業で得ることができる。その内容は、決して出来事だけの質疑応答ではなく、「なぜとらを殺すのか?」「なぜその数は減らないのか」「とらを救うためにどうすればいいのか」という思考を働かせる発問へと発展させることができる。今回、対象となった生徒たちの日本語学習歴は6ヶ月と決して長くなく、自己表現、意思伝達のための語彙や文型の習得は不十分であったが、「考える」ことは日本語の能力に関係なく行っているのである。この思考力を支えるための日本語能力、つまり認知発達段階に応じた「思考する」「考えたことを伝える」ために必要な日本語能力を育成することが「JSL 内容重視クロスカリキュラム」の特徴なのである。

7. 「JSL 内容重視クロスカリキュラム」実践の成果と課題

7-1. 「JSL 内容重視クロスカリキュラム」実践のまとめ

今回の実施を経て、以下の成果が得られた。

- (1) アンケートの結果から、授業を経るごとに、授業に対する総合的なイメージが高まっていること、教科を取り入れた学習に対するモチベーションを高めることに効果がある。
- (2) 教科書分析により、教科内容を横断的に取り入れた「JSL 内容重視クロスカリキュラム」が教科学習に必要な語彙の習得に貢献でき、中学教科書の複雑性に対応できると言える。
- (3) 発問分析による授業の比較により、「JSL 内容重視クロスカリキュラム」は教科学習へつなげるための授業を行うことができ、自然な場、文脈(コンテキスト)がある場での学習機会を与えることができる。
- (4) 発表や作文により、「JSL 内容重視クロスカリキュラム」において「総合的な学習」の能力の育成につなげることができ、生徒の学習に対する主体性を築くことに貢献できる。以下にその観点を示す。
 - ・日本語学習にとどまらず、社会の問題にまで関心を向けることができる。(問題発見能力)
 - ・作文に自分の意見を書き、問題の解決策を見つけようとしている。(問題解決能力)
 - ・テーマに関する情報を収集し、それを処理することができる。(情報処理能力)
 - ・生徒自身が自分の発表とクラスメートの発表とを比較し、自己の改善へつながる意欲を表すなど、自己反省や満足から自信や今後の学習意欲の向上につながった。また、発表では、生徒自身の体験や意見、考えを問う質疑応答が行われたので応答が難しかったようだが、生徒自身の意志や考えは伝えられたため、見学した教師からは学習に効果があったという評価が得られた。(発表評価能力)

また以下の課題も得られた。

- (1) 中学校の教科を担当している教師ともっと連携をとり、教科の授業の内容や進度に合わせた「JSL 内容重視クロスカリキュラム」の編成に取り組む。
- (2) 教科に関連した内容について、知識の導入だけにとどまったものがあるので、教科内容の扱いに関してもっと内容や構成を検討しなければならない。

(3)「環境問題」以外のトピックについても、今後充実させていきたい。

このカリキュラムにより、外国人生徒は教科学習に必要な語彙を習得し、授業に対する自主的、積極的な態度を伸ばすことができる。また、情報を読み取ったり、発表することを通して総合的、実践的な日本語能力を身につけることができる。教科に関連した内容を扱うので、生徒の認知段階に応じた思考力も発達させることが期待できる。認知的発達段階にある外国人生徒は、日本語の能力がまだ不十分な段階であるとは言え、思考する力は十分持っている。そのため彼らの日本語指導においては、その思考力の育成を支え、言葉を言葉だけの指導にとどまらず、考えを言葉で伝える表現力、伝達力を育成することが重要であると考え。そして、この表現力、伝達力こそ、外国人生徒にとって今後生きていく上で必要であると考え、今後も「JSL 内容重視クロスカリキュラム」の発展に取り組んでいきたい。また、このカリキュラムを公立中学校での日本語指導の発展に活かしていきたいと考えており、そのためには、学校教員、日本語指導員に理解してもらえることが重要であると考えている。

参考文献

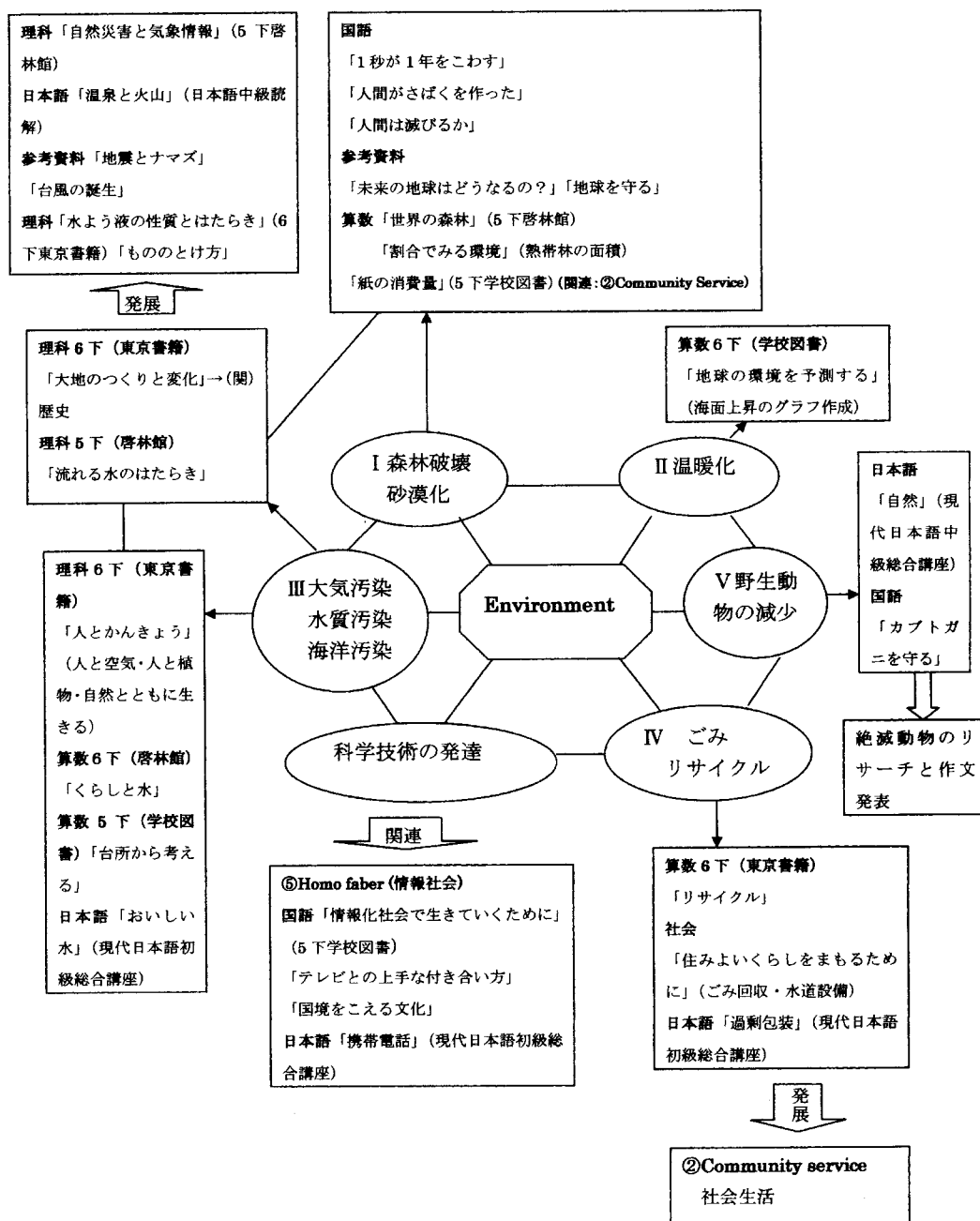
- Cummins, J. (1992) Language Proficiency, Bilingualism, and Academic Achievement. In Patricia A. Richard-Amato and Marguerite Ann Snow (Eds.), *Multicultural Classroom* (pp.16-26). Los Angeles: California State University.
- Cummins, J. (1994) Knowledge, Power, and Identity in Teaching English as a Second Language. In Jack C. Richards (Ed.), *Educating Second Language Children* (pp.33-58) New York: Cambridge University.
- Cummins, J. & Swain, M. (1986) *Bilingualism in Education*. London: Longman.
- 天野正輝(1999)『総合的学習のカリキュラム創造—教育課程研究入門—』ミネルヴァ書房
- 有本昌代(2004)『日本語指導が必要な外国人生徒のための JSL カリキュラム開発』神戸大学大学院 修士論文
- 池上摩希子(1998)「教科に結びつく初期日本語指導の試み」『日本語教育』97号、pp.118-127 日本語教育学会
- 石井恵理子(1997)「国内の日本語教育の動向と今後の課題」『日本語教育』94号、pp.2-12 日本語教育学会
- 伊東祐郎(2000)「外国人児童生徒に対する日本語教育の現状と課題」『日本語教育』100号、pp.33-44 日本語教育学会
- 今谷順重(1999)『横断的・総合的な学習とクロスカリキュラム—新しい問題解決学習のストラテジー—』黎明書店
- 太田垣明子(1994)「単元に主眼をおいた日本語学習の試み」『研究紀要』2号、pp.94-11 学校法人千里国際学園
- 太田垣明子(1997)「教科学習のための指導に関する—考察 一年少者日本語教育の立場から—」『日本語教育論集』13号、pp.57-74 国立国語研究所日本語教育センター
- 伊勢野薫(1998)「質的データ分析による授業の自己評価—アクションリサーチの理論と実践—」『英語教育研究紀要』第21号、pp.9-19 関西英語教育学会
- 清田淳子(2000)『教科としての『国語』と日本語教育を統合した内容重視のアプローチの試み』お茶の水女子大学大学院人間文化研究科 修士論文
- 工藤真由美(1999)『児童生徒に対する日本語教育のための基本語彙調査』ひつじ書房
- 神戸大学教育学部(1984)『教育基本語彙の体系化とその指導方法の究明(特定研究報告書)』神戸大学教育学部語彙指導研究会
- 国立国語研究所(1987)『中学校教科書の語彙調査』
- 小林幸江・横田淳子他(1998)「外国人児童に対する日本語教育の語彙調査」『留学生日本語教育センター論集』25号、pp.17-31 東京外国語大学留学生日本語教育センター
- 齋藤ひろみ(1998)「内容重視の日本語教育の試み —小学校中高学年の子どもクラスにおける実践報告—」『中国帰国者定着促進センター紀要』第6号、pp.106-129
- 齋藤ひろみ(1999)「教科と日本語の統合教育の可能性 内容重視のアプローチを年少者日本語教育へどのように応用するか」『中国帰国者定着促進センター紀要』第7号、pp.70-91

- 齋藤ひろみ(2000)『帰国児童・生徒クラスの『日本語と教科の統合学習』における教室会話の分析』『中国帰国者定着促進センター紀要』第8号、pp.99-123
- 坂元昂・水越敏行(1978)『授業技術の開発Ⅴ 発問構成の新技術』明治図書
- 西原鈴子(1996)『外国人児童生徒のための日本語教育のあり方』『日本語学』Vol.15、pp.67-74 明治書院
- 縫部義憲(1999)『入国児童のための日本語教育』スリーエーネットワーク
- 牧野成一(1991)『ACTFLの外国語能力基準およびそれに基づく会話能力テストの理念と問題』『世界の日本語教育』第1号、pp.15-32 国際交流基金日本語国際センター
- 水越敏行(1999)『総合的学習の理論と展開』明治図書
- 文部科学省初等中等教育局国際教育課(2003)『学校教育における JSL カリキュラムの開発について(最終報告)』小学校編
- 矢崎満夫(1998)『外国人児童に対する教科学習支援のための日本語教育のあり方—算数文章題におけるストラテジー運用の考察から—』『日本語教育』99号、pp.84-95 日本語教育学会

注

- i 文部科学省が企画し、外国人児童生徒等に対する日本語指導などの取り組みを支援するため、平成13・14年度の2カ年計画で実施し、小学校における教科学習に対応した日本語指導カリキュラムの開発を行う。「トピック型」と「教科指向型」のカリキュラムから構成され、AUカード(Activity Unit:活動単位)を用い活動の種類と基本的な文型を提示している。
- ii MYP(The Middle Years Program)は、IBD(The International Baccalaureate Diploma:大学受験生資格プログラム)の前段階で、小学6年生、中学生3年間、高等学校1年生までの5学年をカバーする。このプログラムは、日本ではIBOから認可を受けた大阪インターナショナル・スクール(OIS)や加藤学園などで行われている。生徒が自国の歴史、伝統を理解すると同時に、他の文化にも十分注意を払う知的かつ社会的姿勢を育てようという構想に基づき造られた。従来の教科別の教育を配慮しつつ、さらに総合学習的教科間の連携を重視し、生徒の社会性の育成を図る。MYPの特色は、生徒の知的および社会的発達を育むことにある。履修科目の8教科がAreas of Interaction(関連分野)と呼ばれる5つの共通概念によって結び付けられる。5つの概念とは、① Approaches to Learning(学習法)② Community Service(コミュニティ・サービス)③ Health and social Education(健康と社会教育)④ Environment(環境)⑤ Home Faber(創造発明的資質の助長)である。教科の学習に際し、この5つの分野が常に考慮され、各教科の学習が暗記中心の学習に偏することを避け、生徒の社会的創造的資質を看過することなく育むことを目指したプログラムである。(加藤学園: <http://www.katoh-net.ac.jp>)
- iii 認知活動の必要度少
- | | | | |
|----------|---|---|----------|
| コンテクストあり | A | B | コンテクストなし |
| | C | D | |
- 認知活動の必要度大
- iv クラスターとは、学習する内容がどのようにかかわっているのか一連のまとまりを表す。今谷(1999) pp.82-85 参照。
- v 「サバイバル日本語」とは、生活適応や日常生活で最低限必要となる日本語である。あいさつ言葉や身の回りの物・人の名前や、ひらがな・カタカナ、基本的な漢字などの文字の読み、書き能力のこと。
- vi 中学校学習指導要領 文部科学省(平成10年)
- vii 工藤(1996)に示された『外国人児童生徒のための生活基本語彙リスト3』の語彙にあたる
- viii 国語「ホテルの里づくり」『現代の国語3』(pp.34-46)三省堂
- 地理「広がる環境問題とごみ処理問題」(pp.160-161、資料 pp.18-20)『わたしたちの中学社会 地理的分野』日本書籍
- 歴史「高度経済成長期のくらしと環境」(pp.194-195)『中学社会 歴史的分野』大阪書籍
- 公民「公害の防止と環境保全」(pp.118-119)「資源・エネルギー問題」(pp.126-128)『地球環境問題を考える』

(pp.130 - 133)「アジアの森林と日本」(pp.134 - 135)『新しい社会 公民』東京書籍
英語「Save the Earty」『New Crown』(pp.26 - 28)三省堂
理科 1 下「環境を守る科学技術とわたしたちの生活」『新しい科学 1 下』(p.95)東京書籍
理科 2 下「水の循環」(p.16)「自然と環境保全」(pp.89 - 93)「自然の中の人間」(p.102)『新しい科学 2 下』東京書籍
数学「地球の温暖化」『中学数学 3 』(p.107)大阪書籍



【レベル別能力基準】

【資料 2】

初期	目標	教科書・教材例	漢字学習
(前期)	1. ひらがなとカタカナの習得 2. コミュニケーションスキル(簡単な日常会話力)の習得 3. 短い文または文章の読み書き能力の習得	『こどものにほんご 1・2』 『にほんごを学ぼう 1・2』 『モジュールで学ぶよくわかる日本語 1』 『Speak Japanese Book1・2』	50 - 100 (小学 2 年生レベル)
(後期)	4. 語彙力(主に生活語彙)の拡大(800 語) 5. 文法規則の定着 6. 基礎漢字知識の構築 7. 日本や日本文化への理解 8. 学習への責任と自己管理態度の育成	『Hajimete no Kanji300』	100 - 300 (小学 3 年生レベル)

移行期	目標	トピック・活動	300 - 800 (小学 5 年生レベル)
(日本語能力試験 3 級合格)	1. さまざまな場面における適切な表現での話す・書くことにおける情報・意思の伝達能力の向上 2. さまざまなスタイルのテキストによる読解スキルの向上 3. 文学の適切なテーマ、背景知識の理解力の向上 4. 学習言語の獲得(1500 語以上)と漢字の拡大 5. 文法規則の拡大(接続詞、敬語、授受受身、使役表現などの定着) 6. 認知スキルの発達 ・教材等から問題を読み取り、解決する能力を養う<問題解決能力> ・情報の活用スキルを磨く<情報処理能力> ・発表・評価する能力の向上<発表・評価能力> 7. 日本文化と考え方への深い理解 8. 学習への責任と自己管理態度の育成	・環境問題 <森林破壊・砂漠化><絶滅する動物たち><ごみ・リサイクル><大気・水質汚染> ・文化 <日本の文化><外国の文化><比較文化><世界の中の日本><世界に広がる文化> ・健康 ・歴史 ・生活 <社会生活><日常生活><学校生活> ・障害者 <盲導犬><バリアフリー><点字・手話><ボランティア> ・アプローチ<発表><インタビュー><リサーチ>	

通常学級での教科 学習「国語」	<話すこと・聞くこと> - 自分の考えや気持ちを相手に理解してもらえるように話したり、話しての意図を考えながら話の内容を聞き取ったりすること。 - 自分の考えや気持ちを適格に話すためにふさわしい話題を選び出すこと。 - 全体と部分、事実と意見との関係に注意して、話したり聞き取ったりすること。 - 話し合いの話題や方向をとらえて的確に話したり、それぞれの発言を注意して聞いたりして、自分の考えをまとめること。 <書くこと> - 身近な生活や学習の中から課題を見つけ、材料を集め、自分の考えをまとめること。 - 伝えたい事実や事柄、課題及び自分の考えや気持ちを的確にすること。 - 自分の考えや気持ちを的確に表すために、適切な材料を選ぶこと。 - 書いた文章を読み返し、表記や語句の用法、叙述の仕方などを確かめて、読みやすくわかりやすい文章にすること。 - 書いた文章を互いに読み合い、題材のとらえ方や材料の集め方などについて自分の表現の参考にすること。 <読むこと> - 文脈の中における語句の意味を正確に捉え、理解すること。 - 文章の展開に即して内容をとらえ、目的や必要に応じてよくすること。 - 文章の中心の部分と付加的な部分、事実と意見などを読み分けて、文章の構成や展開を正確にとらえ、内容の理解に役立てること。 - 文章の展開を確かめながら主題を考えたり要旨をとらえたりすること。 - 文章に現れているものの見方や考え方を理解し、自分のものの見方や考え方を広げること。 - 様々な種類の文章から必要な情報を集めるための読み方を身につけること。	800 以上 (小学 6 年生の漢字の復習から中学生で学ぶ常用漢字)
--------------------	---	---------------------------------------

公立中学校における外国人生徒のための 「JSL 内容重視クロスカリキュラム」の開発と実施

有 本 昌 代

要 旨

出入国管理及び難民認定法の改正により、日本に在住する外国籍の人々が増加し、日本の公立小中学校に在籍する日本語指導が必要な外国人児童生徒も増加している。しかし、公立小中学校で行われている日本語指導は様々な問題を抱えており、特に、認知発達を目的とした日本語教材の開発は進められていない。このような現状のもと、日常生活でいくら流暢に日本語が話せても教科学習についていける外国人児童生徒は少ない。中学校の場合はさらに学習に必要な語彙が難しくなり、学習内容がより高度になることから、日本人生徒と一緒に通常学級で教科を学習することにはかなりの困難が予想される。そのため、テストの成績が悪く、認知面に問題があるとされてしまう場合もある。このような言語の二面性は、Cummins (1984)により述べられている。「生活言語」は年少者の場合2年ほどで習得できるが、「学習言語」は習得に5年から7年かかり、学習しなければ獲得できない。そこで本研究では中学校における「学習言語」を育成するための日本語指導カリキュラムが急務であると考え、開発に取り組んだ。本研究で開発したカリキュラムは、公立中学校に在籍する外国人生徒が第二言語である日本語で教科を学ぶことから、日本語でのイメージ・プログラムに相当すると考え、インタナショナル・スクールで実施されている第二言語教育プログラムを公立中学校の日本語指導に応用した。本研究のカリキュラムは、複数の教科内容を横断的、総合的に取り入れた内容重視の日本語指導であり、認知発達段階に応じた思考力の育成を支援することを目的とした点に特徴がある。そして、このカリキュラムを実践し、授業に対する意識調査、初級日本語テキスト・中学教科書との語彙分析比較、発問分析による授業構造比較から考察した。その結果、本研究で開発したカリキュラムが初級クラスから教科学習へ移行する段階のカリキュラムとして効果的であると考えられる。この「JSL 内容重視クロスカリキュラム」を今後の公立中学校での日本語指導の発展に役立てられれば幸いである。